

取材内容Vol.5



・佐々木先生から若い研修医・医科大学生にアドバイスはございますか？

医師が今みたいに保険診療だけで高給取りでいられるかという、今の若い医師達が僕ぐらいの歳になる頃はそんなことは多分ないと思います。

特に、花形のテクノロジーを駆使した、例えば循環器でいえばカテーテル関係とか消化器でいえば内視鏡関係などのそういう治療は素晴らしいけれど、素晴らしいのは医者ではなくてテクノロジーということになります。

そうすると、ここから10年の内にそれはかなりの部分が医者ではなく、医療技術者であれば実は機械のオペレーションだけなのでできてしまうかもしれません。

どんな患者さんがどういう治療を受けるのか、この人はこういう所に気を付けなければいけないなどはAIが習得していくので世界の有名な医師達の腕前とスキルがAIの中に蓄積されて、スイッチのON・OFFだけで治療が終わってしまう時代がくるかもしれません。

技術部分においては、そのAIに勉強させる側にいるごく一部の腕のいい医者を除くと後はオペレーターになっていくと思うので、それは相対的に誰にでもできる仕事になり得る可能性があります。

診断の部分に関しても、やはりAIが優れているのは明らかです。そうすると医師達は診断の結果を患者がちゃんと納得できるように伝える事。

例えば、パソコンから「肺癌のⅢ期で治療方法がありません」と結果が出た時に、患者さんが納得するかというとなかなかできないので、そこはちゃんと主治医がいて、例えば機械の検査の結果はこうで私の見立てと同じですというような事をちゃんと伝えるインターフェイスとして機能しなければいけないのです。

そうすると、医師のスキルとは何かと言われると、技術ではなくてコミュニケーションだと思います。

コミュニケーション能力のないお医者さんは多分居場所がなくなるのではないかと思います。医師として直接関われる仕事で生き残るとすれば在宅医療のようにその人の人生観・価値観と向き合う仕事。

あとは、緩和ケアこれも同じで、終末期医療とかになります。そういう意味で言うとテクノロジーの世界に進むのか、或いはヒューマンサポートというカリベラルアーツの世界に進むのか、まあ両方できるのが1番いいと思うのですが、ただ医者としてのスキルとして技術や知識があってもどん

どん陳腐化していくし、そういう部分は覚えていなくても AI が覚えて、しかもアプリになれば患者さんと医者の情報格差自体がなくなってくるでしょう。

患者さんはあまり知らない、医者はよく知っているという情報格差が僕らの優位性を保っていたりしますが、今の患者さん達は非常によく勉強しているので医者よりも病気の事を詳しく知っている場合もあります。

そうなるとうちの資格とは何なのかとなるので、その辺りは少し考えた方がいいかなと思います。また、国民皆保険制度がいつまでも継続されるか分からないですし、あとは医者の本来の仕事は保険診療ではなくて、やはり健康を守る事。

保険診療では患者さんが病気にならないと僕達は関われないのです。

健康保険制度という形で実際には疾病保険ですから、本当に健康を維持しようと思うとやはり病気になる前に、なる人達の所に我々が行かなければいけない。

それは保険の仕事ではなく、街づくりや地域づくり、教育等、そういう分野になるのだと思います。ただそういう場所にちゃんと出ていく勇氣があるのかという所ですかね。